



水無神社略記

長野県木曾福島町一、一七八番地

水無神社々務所

電話 (0264) 21009番

一、御祭神 高照姫命

大己貴命の御子であり、農耕治水の祖神、衣、食、住、の守護神と伝えられる。

二、御社名 水無神社

古くはその時代により、水無大明神、水無天王、水無宮などと呼ばれた事もあった。
水無はミナシ、水成しであり、水主(みぬし)と言われる。

三、境内社

天照皇太神宮、八幡宮、春日神社、木曾之宮(郡忠靈殿) 町内各社会祀社、祖霊社等。

四、社殿及び社地

本殿、拜殿、神楽殿等主な建造物は何れも明治六年より十二年迄の造営になる神明造りで、神饌所、宝蔵、社務所は昭和の初期の建築で合計百十八坪、この外に御旅殿、全社務所等三十二坪がある。
境内地は千三百二十二坪で千余年を経た数多くの檜、榎、杉等が社殿全体を囲んで密生、五千余坪の境外社有地はそのほとんどが境内に接した山林であり、境内と共に一大森林をなしている。

五、由緒沿革

鎮座、創立の年代は詳らかでないが、弘安年間に飛騨一の宮水無神社を御勧請奉斎したものと伝えられる。現存する記録によると、延文二年(一三五七年)六月、越後守藤原家有(木曾領主、木曾家有)によって社殿の再興がなされたのを始めとして木曾氏代々の守護神として木曾総鎮守と称され御嶽神社と共に深く崇敬されて来た事が知られる。
天正年間木曾氏は下総へ移封となり、木曾は尾州藩の代官山村氏の統治するところとなったが山村氏も又代々崇敬厚く、木曾氏と同様に、社殿の修築、神領の寄進等も再度に留まらず、近郷十一ヶ村をして奉仕せしめた。社領は木曾家より寄進あり後尾州家累代除地を賜わった。
明治維新に至り山村氏美濃へ移った後はすべて福島町氏子のみの奉仕するところとなったが近郷町村にも崇敬深からず明治五年十一月村社に昇格、次いで大正十三年三月には郷社に、更に昭和十年十二月に県社に列せられた。昭和二十一年四月国家の管理を離れ宗教学法人として神社本庁に所属している。

六、祭儀

四月二十九日 祈年祭 (春祭)

七月二十三日 例祭 渡御祭

十一月二十三日 新穀感謝祭 (秋祭)

大祭の他一月一日の元日祭を始め年中の恒例祭典、二十一回、毎月一日には月並祭がとり行われる。
また、結婚式初言詣、各祈願祭報告祭など社頭を賑わす行事も多く、中でも講中一同の家内安全を祈願する家祈禱祭は毎年一月十五日、氏子のほか、遠く名古屋東京等よりの崇敬者をも招き、数百年の伝統に従って盛大に執行されている。
交通安全の祈願は、古く江戸時代からの実績(中仙道木曾福島関所を守っていた山村代官は、街道通行の安全に意を配り、交通安全祈願の為、しばしば社参している。)をもち、その霊験は特にあらたかで、近郷からの参拝も少なくない。

七、宝物

- 蓑 二 室町期、鎌倉期
- 太刀 三 銘□恒(県室)外
- 棟札 多数 鎌倉期以降
- 古文書 全
- 懸仏 全 鎌倉期
- 狛犬 二 全
- 古鏡 三 全
- 御深草院御真筆 一 その他、祭具、調度品、絵馬等江戸期のもの多数がある。

八、特殊神事(みこしまくり)

七月二十三日に行われる渡御祭はみこしまくりと呼ばれる奇祭である。新造された約百貫の神輿は「精進」(惣助幸助)の指揮に依って梓持衆の肩に担がれ神社を出発祝歌、神歌の間に「惣助、幸助」の掛声勇ましく、町内を練り、夕方遅く飛騨街道の見える町外れに至って、掛声と共に神輿を地面に放り落とし、横まくり、縦まくりと夜を徹して転がし廻る。巨大な神輿が夜空に空を切って倒れ転がる壮観さは見た人でなくては想像出来ない。
すつかりこわれ果てた神輿が神社へ還御になるのは翌早朝となる。
伝えるところによると、往古飛騨一宮の言水無神社の近くに戦乱が起こり神社はその渦中に巻き込まれようとして居た。この時この地へ出稼ぎに来て居た木曾の人「惣助と幸助」の二人が、この状を見るにしのびず、故郷の木曾へ遷座する事を計画、早速神輿を急造して木曾へと向かった。幾多の山、谷を越え飛騨と信濃の国境に到った時、追手に迫られた。もみ合い押し合いのうち神輿はとうとう肩を外れて路に落ち、峠の頂から木曾領へと転げ落ちて行った。
この様にして危機を脱した一行は神輿を奉じて無事に木曾福島へ着き、伊谷の地へ鎮座する事が出来た。
それで氏子達は「惣助と幸助」の労苦と偉業とをしのびこの故事にならって掛声も勇ましく神輿をまぐる(転がす)のだと言う。

